

# 認知症

## 精神科病院①

(1面の続き)

石川県立高松病院の病棟にある「デイルーム」。約50人が日中、食事や運動をして過ごす。一見、介護施設のようにだが、病棟の入り口は施錠され、ドアが開くと注意を促す音楽が流れる。ナースステーションに看護師が入るにも、その都度、鍵が必要だ。

午後6時過ぎ。転倒の危険性があるなど、一晩中目が離せない患者のベッドが運び込まれてきた。この日は12台。7時半には照明が落とされたが、ずっと歩き回る女性(84)がいた。「私のバッグどこかね? 財布が入ってて。帰らんとお父さんの食事が……」アルツハイマー型認知症で、この日、入院したばかり。妄想や暴力などの症状が悪化してここに来た。看護師が、家族が持ち帰ったと説明すると「何で息子の名前を知ってるの。私はどこも悪くない。入院なんかしてない」と、歩

# 看護し通し夜錠施棟病

## 「入院してない」「歩き回る患者

き出す。出口を探して手当たり次第にドアノブを回すが、鍵がかかっている開かない。

午後9時半。何度座らせてもフラフラ歩き出すため、医師が呼ばれ、睡眠薬などを増量。興奮状態は収まらず、危険と判断され、車いすに板のテーブルをひもでくくり、立ち上がれないよう抑制された。「何で私こんな目にあ

わなあかんのー」。泣き出し、板をパンパン手でたたいて怒り出す。

午後11時過ぎ。男女が言い争いをしていった。トイレに起きてきて、戻る部屋が分からなくなった男性(71)が、近くの女性のベッドに潜り込もうとしたからだ。

「と話す。」

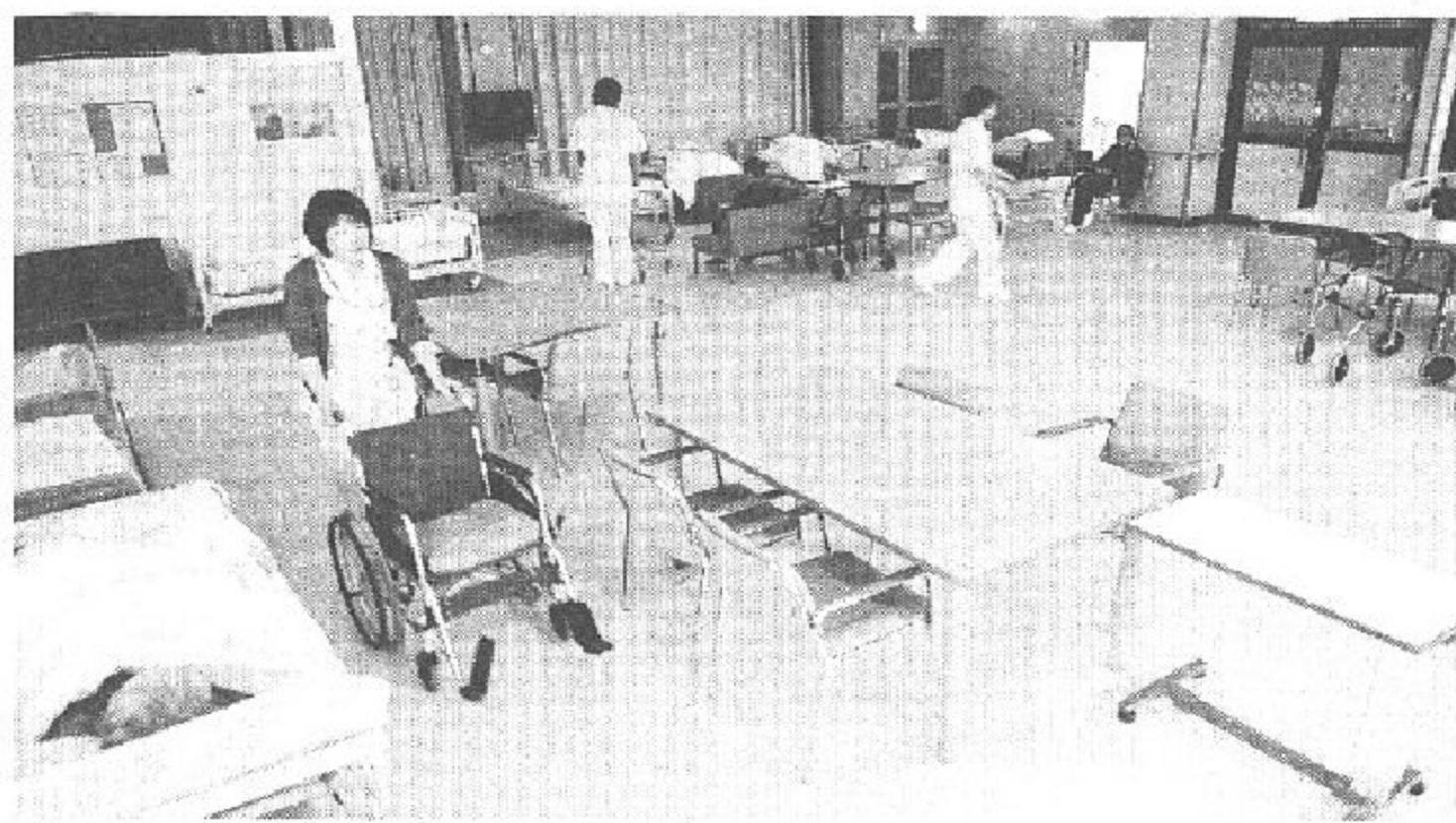
別の男性(82)はテーブルによじ登って横になった。看護師が「こっちの方がフカフカですよ」とベッドに誘導。男性は布団や毛布の使い方が分からなくなり、マントのように肩に掛けて颯爽と走り出した。

\*\*\*

日本の精神科病院は、先進国でも特異な位置を占めている。精神疾患の人が入院する精神病床は34・4万床あり、人口あたりの病床数は諸外国より多い。平均入院期間は多くの国が50日未満に対し、日本は約300日と飛び抜けて長い。

精神科病院は明治時代からあるが、増えたのは1950年代から。公立病院の不足を補うため、国の補助金で民間病院が相次いで建設された。精神病床の9割が民間病院で、民間がこれほど多いのも日本の特徴だ。整備を急ぐため、医師数は一般の病床の3分の1、看護師は4分の3でよいとする特例が今も残る。

64年に駐日米大使が統合失調症の少年に刺されて負傷する事件が発生。精神障害者を「隔離収容」する流れが加速し、病床は増え続けた。生活の場ではない病院への長期入



ベッドが運び込まれる夜間のデイルーム。介助のため慌ただしく看護師が働いていた(石川県立高松病院で)

騒ぎが落ち着いた午前1時過ぎまで、3人の看護師が忙しく働く。女性の車いすの板は明け方外され、女性は9時になっても出口を探し、歩き続けていた。

北村院長は「在宅生活を支える支援が重要だが、暴力や幻覚などの症状が強い場合、短期間入院して、集中的に薬の調整などが必要な人もい

院は、本人の生活能力を奪うといわれる。欧米では、入院よりも地域で生活しながら治療する取り組みが本格化した。それが対照的だった。

入院患者の大半は統合失調症だが、治療薬の進歩などで96年に21・5万人だった患者は2011年に17・2万人に減少。認知症は同期間で、ほぼ倍増した。増加の背景には、高齢化の影響に加え、「統合失調症の患者減少の穴埋めをしているからだ」との指摘もある。

国から補助金を受けた研究会の調査(13年)では、認知症で精神科に入院した人の入院理由(複数回答)の8割が、徘徊や暴力など「行動・心理症状」の悪化だった。だが、「介護者の事情」4割、「家族の疲弊」3割と、医療の必要性だけが入院理由ではない実態もある。

ご意見・ご感想をお寄せください。〒1100・8055 読売新聞社会部  
FAX 03・3217・8363 shakai@yo  
miuri.com